



年頭にあたって

明けましておめでとうございます。

当協会の昨年をざっとふりかえってみますと、目玉の行事が殆んど中止になったことが甚だ残念であります。立春句会・梅まつり俳句大会第二部・桜まつり俳句大会第二部・新設の小田原秋季俳句大会第二部がそれです。それでも、立春短冊吊るし、藤田湘子記念大会、秋の吟行会が無事行われたのは、砂漠に泉のような潤いとも言えましょうか。

また、梅まつり、桜まつり、小田原秋季各大会の第一部が欠かさず実施されたこと、また、この協会報が順調に発行され続けていることは、心強い限りです。今年こそは、コロナ禍に打ち勝つべく、会員や理事の皆様のご協力をお願いすると共に、ご健康とご健吟を祈って止みません。

令和五年元旦

小田原俳句協会会長

池田 忠山

「俳句おだわら」10句抄(664号より)

佃 悦夫 抄出

冬瓜の矢鱈と下がる垣根かな
秋の暮一本松よいつまでも

稲刈るや鴉五・六羽ついて来る

神の住む山より紅葉始まりし

谷まるごと葛に占領されてゐる

コスモスや素顔のままの四季の里

夜半の秋無性に文字を食べたくて

箒草ふわふわ赤い空気かな

十月や鉄扉がさしむあばら骨

ブリューゲル枯木ばかりで偏頭痛

池田 忠山 抄出

人去りて鳥の集まる刈田かな

老いてこそはらから良けれ衣被

鉢そろひ人形そろひ菊日和

古九谷の紺青深き白露かな

かけてみてまた拭く眼鏡十三夜

虫の音や浅田次郎に袖濡らす

団栗が生徒の如し浜生句碑

花火師の影の一瞬揚火花

夾竹桃八十路の我を夫知らず

毬栗やちくり心に突き刺さり

新井たか志

河本チヨ子

久保寺トミ子

市川めぐみ

村場 十五

石井千代子

小林永以子

大石 和子

山本 すみ

柴田 礼子

高井 幸子

陌間みどり

神山つとむ

田中 幸子

中山智津子

守屋 まち

小野 菊土

出澤 洋子

山田 照子

木村予史重

悪事

佃

悦夫

失脚の始め蒼白いほむしり
血相を剥き出し枯野行かむとす
朧月むしゃぶりつかむという眼

線香花火終らば堂々悪事せむ

どこまでもレールを歩く晩夏かと

ジスイズアペン鋭く虫を刺してみる

白装の神の下僕となる緑陰

青野にて死んでも漂流つづくのか

遣羽根

池田

忠山

真つ先に富士山頂へ初明り

初鶏の声あめつちの闇ひらく

磨る墨の部屋ぢゆう句ふ試筆かな

背伸びして高きへ結ぶ初みくじ

遣羽根のときに富士越え筑波越え

ジョーカーをひいて五歳が米ねこぼす

空へ透くをみなの木遣り出初式

初場所や大川わたる触れ太鼓

理事会だより (12・8)

一、梅まつり俳句大会実施に向け当日の役割分担を決定。理事は9時半集合。(本号11頁参照)

二、76回桜まつり俳句大会の兼題を「桜又は花」「猫の恋」に、選者特選賞選者を佃名誉会長、大石顧問、池田会長、青梅・おほゐ・小田原鹿火屋に。(応募・大会要項は本号12頁)。なお募集文言については現行どおり「未発表作品に限る」とすることとなった。

三、立春句会の短冊を各グループに配布。

四、懸案の類似句問題について会長から、審査会の運用基準を理事会準備会で議論中であり案が固まったから理事会の審議にかけ、桜まつりから適用したい旨報告。

理事会日程

2 / 9 3 / 9 4 / 13

(毎月十五時開催)

初夢

新井たか志

紺碧の海を一日蜜柑山

鋭角に縄を操る雪吊師

一日をラヂオ流しぬ冬田打ち

枯野道しばし不動の測量士

冬鳥の影の零るる山上湖

板前の剃り青くして鰯握る

水仙の鶴首揃ふ日差しかな

初夢の生まれ変はりの白兔

だだっ広い

大石 雄介

雨蛙が蕾に還ってしまつたから

時間のごと道に落ちてた女郎蜘蛛

枯蟻螂の笑いあつてる子午線かな

冬畑は急流であるだだっ広い

極月や人間が減っていく曲線

凧がキエフキエフ鳴っている

風花の方も口を開けている

不要不急の生きものやつてる大旦那

俳句おだわら（12・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（11・25）

久江報

鐘澄めり一服に癒ゆ三千院

足立 和子

ざる菊の見立ての富士へ鳶の笛

川本 育子

控へ目に生き草の実につらつらと

高橋 小糸

函嶺と丹沢つなぐ冬茜

山崎 悦子

冬立ちし月息づける皆既食

近藤 久江

◆香雨・梅ごち（11・27）

忠山報

目覚むれば障子明りと沢音と

肥後ちさこ

うすうすと明らむ寝間の白障子

関戸わよこ

切り貼りの鳥よ花よと白障子

青山 典子

たをやかに親もめかして七五三

門松 鳳文

境内を包む静けさ神の留守

吉田 百代

団欒の声のもれくる白障子

吉田 康雄

開け閉めの指のたをやか白障子

陌間みどり

ひとり居の灯をつつましく白障子

小澤 純子

境内と伽藍といはず冬の日向

池田 忠山

◆春野（11・20）

きよ志報

七彩のモダンアートや柿落葉

秋山 昇

学僧の背にしきりに散り紅葉

伊藤はる子

自己主張

長谷川きよ志

ドアノブに蜜柑ドアポストに明の春
携帯の待受画面待つ春や

丸められたカレンダー春が自己主張

露天湯の首から上は宵の春

前立腺放射線春未だ箱根登山線

バナナ剥く一皮二皮三皮目に春

春睡の目覚めて「今日も生きていた」

糠床を掻き混ぜ春を探し当て

点滅

山田 照子

採れさうで採れぬ高さの烏瓜

冬紅葉メタセコイアの水鏡

十二月八日深夜便のジョン・レノン

絵のやうな文字字のやうな絵の小春

银杏散るけふは一万三千歩

カシミヤのセーター値札裏返る

伝言のあをき点滅霜の夜

畑しづかなればしづかに初鴉

ていねいに神棚を拭く神無月

ロボットの手を振る勤労感謝の日

海光や冬菜畑の馥郁と

冬あたたか一揆の村に寺多し

頃合ひの石頃合ひの冬日向

◆こよろぎ(12・8)

寒林をぬけて小川へ白き鳥

鳥声も日も逃げやすし年の暮

母よそる朝の一杯根深汁

◆青梅(12・7)

風邪飛ばし元氣じるしの八十路かな

初冬の稜線かたし双子山

炉火囲む一期一会の木曾の宿

野菊晴正午の時報とうに過ぎ

子の継がぬ家直しをり冬椿

甲州の風の筋みち柿簾

◆みなみ(11・19)

舞うように走る園児や草紅葉

月今宵宇宙の神秘垣間見る

石に木に文字彫る人や神無月

野菊咲く道を歩いて帰りけり

内田知江子

尾崎 一夫

瀬戸 悠

二見 和江

長谷川きよ志

つとむ報

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

幸子報

大塚 行人

湯本とし子

加藤まり子

久保寺トミ子

田淵 令子

田中 幸子

かほる報

市川めぐみ

豊田 幸枝

斉藤 静

小瀬村信子

荒星

大石

和子

荒星になつて騒いでまた明日
 メビウスの輪に乗り猫と冬に入る
 わけもなく走りまわるよ晚白柚
 鹿のよう戦車のように冬の森
 冬の森ゲジゲジ羊歯と呼ぶ人あり
 私ハモグリバエ幼虫後期高齢者
 柿柿柿と鳴いてさわいで掠鳥ウ
 風草になつて歩けば曾比の道

日面

芹澤

常子

稲架組める棚田に灘の入日かな
 返照の運河べつたら漬提げて
 冬耕に山壁あをく暮れゆけり
 笹鳴や山の翳濃き斜畑
 前山はいま日面や餅筵
 山祇に捧ぐる御酒や初明り
 注連張りて滝口の水細りけり
 腹括りし女の強し水仙花

櫓の音に水の近江の秋深む

日の暮れは人声恋し煮大根

神の留守柿の水を替へにけり

散歩道気ままに変えて草紅葉

◆たけのこ(12・5)

到来の温み溢れる吊るし柿

象パンダ引き連れ渡る冬の雲

前向きな言葉集める古日記

瑠璃色の湖に映れり紅葉かな

百才の恩師の訣れ冬田道

◆沈丁(12・10)

お社の清閑として凍みる空

サークルのクリスマスツリーハンドメイド

聖菓切るじゃんけんぽんで母忙せわし

クリスマス六百元のモンブラン

誰の分でもない聖菓ひとつ足す

クリスマスシャッター通りの小さな灯

清拭の湯気の優しきクリスマス

手仕事の際限なしやつるし柿

三面鏡に歳月の染み冬銀河

白息で夜明けの空に清書する

加藤 富江

加藤 れい子

加藤 健治

加藤 かほる

悦女報

三木 泰子

徳田 公子

小宮 早苗

久津間百合子

宮崎 悦女

寶子山報

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子

瀧本 敦子

勝木 澄子

菅野 英余

高井 幸子

片野 節子

峯尾ユキエ

ぐずる兎にサンタクロースの靴を買ひ
フィンランドサンタの手紙孫に來た

河本チヨ子

団欒が平和なイブの贈り物

清水美代子

苦学生聖夜のパリで皿洗い
クリスマス鯛の煮付を突つつける

松下 俊之
武居裕美子
寶子山京子

◆鷹(12・3)

十五報

冬濤や石ひとつ置く流人墓

青木 孝子

初霜や生徒を急かす声ひびく
運ばるる茶粥うれしき今朝の冬

池田 令子
西賀 久實

強霜や富士へ傾く朝の月

佐宗 欣二

風花や龍神祀る漁師町

須田 晴美

紙飛行機旋回したる冬田かな

中田 笑子

養生やしんと日差しの冬田の面

百川 秀子

冬晴の太平洋や水脈白し

山崎美知子

冬うらら片足立ちの太極拳
振鈴に灯る宿坊息白し
丹前に片手枕の父の夜
三島忌やスカーフ紅く振付師
振落す傘の雫やつはの花
らくがんは小鳩の形冬うらら
火の鳥のけふは近しよ大根干す

柏木 良花
庄司 下載
瀬戸 りん
高橋久美子
中山智津子
齊藤 桂
芹澤 常子

踊果つ足につきたる鼻緒あと
新酒汲みをり山の辺の西明り

大木 敬子

寄生木の鞠こぼさじと冬櫛
玄関を掃きし朝や花柵

大島美恵子

医帰りの序での書肆や今朝の冬
叔父逝きし朝や大きな冬の虹

田下 昌人

一駅を歩き十年日記買ふ
三島忌や仕事帰りに蒼き富士

中根 和子

地方紙に包みて届く林檎かな
味噌汁の出汁とる朝ボーナス日

加藤 幾代

都会へと煽る電車や冬田道
フルートに「ふるさと」吹くや山眠る

守屋 まち

十二月とて暇顔の美容室
笛吹いてギター調弦冬ともし

米山 翠

冬田道星は無音のこゑ降らし
酒蔵は夕日まみれや寒の水

來田 新子

冬木立雄々し大樹の孤独かな
手を触れて命確かむ冬木立

大沢 年子

裸木や内なる声を聞いており
枝ごしの落暉煌々冬木立

片野 秋子

◆おほる(12・14)

秀泰報

小林 環
下平 美子
杉崎 せつ
鳥海 壮六
古屋 徳男
村場 十五
高橋みどり
中根登美子
石井きよ子
横塚 昌平

節太の指は人生柚子の風呂

ふつくらと過去も平らに布団干す

冬木立幾星霜を送りしや

冬木の芽光明四方に輝かせ

お峰入りユネスコ遺産入りにけり

こだわりを捨てて生きるや冬紅葉

街角ピアノ流る聖夜のウクライナ

老二人背中丸めて日向ぼこ

戯れし風は幾筋冬木立

言訳を重ね重ねて冬籠

忘れたか戦の悲惨頬被り

◆零(12・15)

白菜のみずみずしさを「持ってけ」と

和して同ぜず冬瓜ゴロリと一個

冬帽子背中のにせて草むしり

冬帽子・黒ジャン黒靴・冬の出立ち

たましいをレモンで満たせよ寒い日は

冬帽子ぐずり泣く児や夕広場

银杏落葉母と寝た夜の柔らかき

冬帽子被れば艶出る芸の人

かえらない寒卵抱く兵士妻

中村 昌男

石井千代子

二上 光子

香川 花子

坂入清四郎

瀬戸とみ子

小野 菊土

中津川晴江

廣田 悦子

加藤 春江

風間 秀泰

史郎報

青木たけを

伊藤 道郎

井上 良子

川合 昌子

木村 和彦

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

岡本 史郎

◆実のり(12・15)

たか志報

諸々のことを忘るる柚子湯かな

銭湯の大富士眺め冬至風呂

カピバラの柚子湯につかる異国の地

冬晴やトランペッター海に向く

◆山北(11・24)

由里子報

朝寒や脱水告げる洗濯機

転がり出るサクマドロップ秋去りぬ

思い立ち枯野の席を予約する

十二月八日喉に魚の骨の棘

落葉掻き隣の犬に声掛ける

鍵穴から抜けない鍵や榎櫃の実

◆草むら(11・19)

重満報

餅搗や気づけば世代替はりをり

山門に寄る「天んぐ御膳」落葉中

月明の修羅道を行く他は無し

化石展外はヒト科に降る落葉

◆無所属

樫や二代先まである血筋

夜の雲高層階の火事に照る

返される言葉は無くて冬桜

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

和田恵美子

尾崎 幸子

中山 妙子

尾崎 竹詩

石田加津子

竹下由里子

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

畠 梅乃

蓑宮 わか

烏瓜山の宮司はいつも留守
 火の海となる鎌倉や冬夕焼
 番台に睡るデブ猫いわし雲
 秋の空とつばらわれた大煙突
 焚火して母の呼ぶ声背後から
 冬鷺の暮るる容は孤高なり
 時により木枯しが来て騒々しい
 銀杏散るまばゆきまでの中学校
 部屋ごとの匂ひを秘めし冬障子
 片耳に鳶片耳に冬の浪
 極月や基金は匿名にて振り込む
 枯草をたぐれば太き根の確か
 ス克蘭ブル交差点噛む冬の歯
 ピダハン族ククク族よ裸の子
 七日粥すすれば戦禍遠くして
 冬のゆり錆色の薔薇よく似合ふ
 極月の身に水馴れて酒匂川
 秋蛙ころぶ円周率は永遠
 かなかなが鳴いてそろそろごはんなかな
 着ぶくれて子は泣きながら国逃る
 敵は誰しばれる痛み冬將軍

一ノ瀬茂代
 北村 文江
 木村美千代
 出澤 洋子
 岩楯惠津子
 田畑ヒロ子
 穂坂志げる
 山田 照子
 須田 聡子
 小澤 園子
 瀬戸 正洋
 岡田 典代
 大石 雄介
 大石 和子
 山口 千代
 柴田 礼子
 山本 すみ
 杉山あけみ
 小島ノブヨシ
 大佐田うづき
 木村予史重

新作5句

若林 京子

喪の家の細き階段寒椿
 戸締りを指呼で確かむもがり笛
 少年の素振り無心や冬夕焼
 月一で来てくれし子やおでん鍋
 冬落暉亡夫が覗いて行つたよな

百川 秀子

初暦能舞の獅子袖を張る
 猪口差して御慶を交はす遺影かな
 人日の改札見ゆる甘味処
 風花や女のつくる飴細工
 雪積むやおもちやの箱の眠り姫

中山智津子

吹晴の富士やあいさの浅もぐり
 急湍の小石つややか冬雲雀
 夕暮の光は雲へ鴨着水
 陣取るのは海猫か鷗か冬夕焼
 夕映にしるき阿夫利嶺鴨浮寝

市川めぐみ

海鳴りを喇叭に入れて百千鳥
 足早の春を追いかけて指に傷
 クロッカス羽を見付けに行くのです
 愛されたいだけの春服さがしだす
 落椿ひとつふたつの嘘まじる

伊藤道郎

(令和4年10月号)

父性とは十六夜の白き灯台

岡本史郎

十六夜とは「いざよふ」を語源とする。「いざよふ」はぐずぐずする、ためらうの意。思い返せば自分も父として家庭の中でぐずぐずしてためらう事の多かつたことに気づかされる。妻の方が現実的で判断が早いことが多かった。そんな現代の父性を十六夜と見抜いた作者の眼力。そしてそれを白き灯台とイメージした鋭き感性。月に照らされた灯台が白くもの悲し気に立っている姿が目に浮かぶ。

地虫鳴く葉っぱは葉っぱで鳴いている 大石雄介

(令和4年11月号)

ヒト中心の生き方をしていると世の中すべてが静止画のように見えてくる事がある。逆に自分が地球の片隅に生きていると思うと色んなものが見え、聞こえて来る。痩せこけた秋刀魚などを見ると海の中では大変な事態が起きているのではと思ひ、紅葉の焼け焦げたような景を見ると猛暑から逃げられぬ樹木の過酷さを思わずにはおられない。地虫鳴くはきつと地の動悸なのだろう。

小澤 園子

(令和4年10月号)

二百十日地球にもある不整脈

伊藤道郎

立春から数えて二百十日目。二百十日は九月一日のこと、台風襲来、農業には厄日であります。不整脈とはだいたい人間に使われる言葉、地球の不整脈といった表現がユニークで感覚的な句。私も一地球人。今は、コロナ禍、戦争、温暖化、地殻変動、地震、不整脈ではすまされない状態。人間がこの地球を壊しているのだと思う。二〇五〇年になったらどうなることやら？

アイスクリーム頭痛犬神に崇られて 小島ノブヨシ

(令和4年11月号)

アイスクリームとか、かき氷を食すと頭がキーンとなります。これはあるドクターによると何とか症候群らしき名がついています。頭痛犬神という表現、そこまでいくといった感じである。発想がユニーク。犬神とは人に憑くと信じられる犬の霊。迷信。昔の親の仇討ちゆえ、その霊をわが身につけ本懐を達したという言い伝え。(犬神憑) 犬神ののりうつつた精神異状。作者に恐れ入りました。

須田聡子

(令和4年10月号)

阿波踊蹴出しの波の押し寄する

齊藤 桂

臨場感あふれる一句。

阿波踊りは「浮いて踊るは阿波踊り」とも云われるほど苛酷な踊りだ。男踊りや女踊り、近年は女性による男踊りも人気だ。笛太鼓、鉦など句材は尽きないが、女踊りの浴衣のあでやかな「蹴出し」に焦点を当て、押寄せる群舞を見事にとらえた。「ヤットネー」「ヤットヤット」の弾ける掛け声と観衆の喝采が聞こえてくるようだ。

一族のピンからキリや秋彼岸

尾崎一夫

(令和4年11月号)

「ピンからキリ」と、とても世俗的なことばにびっくりした。が、声に出して読むとこの「ピンキリ」がびたりと嵌まっているのがわかる。秋の一日、法要に集う縁者達。御斎では世上の話に盛り、挙句には誰彼の近況話。ときには称賛とも怨嗟とも。そんな大人の話を聞かぬ素振りでも聞いている子供も。漂うごちゃごちゃ感が面白い。ピンにはなれなかつた自分を私は、肯定しよう。

守屋まち

(令和4年10月号)

やさしさをときどき忘れ草の花

小澤純子

一読「やさしさをときどき忘れ」にハッとさせられた。近頃の私は「やさしさをしばしば忘れ」なのである。子供の頃は母に「お食さんにもお茶を出す様な子だね」と言われていたのに……。

この頃、物忘れの激しくなったことに腹を立てたり、うとんじたりという始末。

「草の花」の慎ましさを喚起させて頂いた感謝の一句。

くちすぎの苦労一枚たばこ干す

大佐田うづき

(令和4年11月号)

子供の頃、秦野に暮らした。当時は煙草の産地で、隣は煙草農家。季節になると煙草の葉を掛け連ねた縄が庭中に吊られた。私達は、かくれんぼをしたりして遊んだ。晴れている時は良いが、急に曇り雨粒が落ち始めると、さあ大変、葉を濡らさない様に大人は大慌てに納屋に取り込む。乾いた葉は一枚一枚それまでの苦労を思い丁寧に皺を伸ばす。「くちすぎの苦労一枚」は簡潔にして含蓄ある表現。

城苑俳句・春の部

(合同句集第十二集15頁より近藤久江抄出)

編みかけの透かし模様や春の雷
 春雨や上枝ほづえの先の小宇宙
 薬やいつか大樹となる構え
 竹の秋軽トラに積む魔法瓶
 なるようになるさふんわり春の雪
 土割つて庭の隅より露のたう
 猫の恋合せ鏡の肘を上げ
 桃咲くや城ある町に存らへて
 花の山勾配ゆるき滑り台
 花衣少しゆるめに帯締めて
 花冷えのからだは薄き器なる
 春が来た手足グインと蛙の子
 囀や集合場所はことと決め
 山笑う古民家酒蔵レストラン
 ひっそりと山あいに咲くヤブ椿
 菜の花や心にもやす元気の気
 路地裏の静かな余生すみれ草
 たんぽぽや土手は園児のすべり台
 空映す池のさざなみ春麗ら
 長閑しやラジオ終日野に流る

渡辺喜久枝
 石井きよ子
 石井千代子
 石田加津子
 石田 和代
 板谷 雅泉
 市川 恵子
 市川 好子
 一ノ瀬茂代
 伊藤はる子
 伊藤 道郎
 伊藤 康夫
 乾 利子
 井上 和子
 井上 良子
 岩楯恵津子
 岩本ひさみ
 植松テル子
 宇田川聖一
 遠藤シヅ子

城跡の骨董市や花三分
 桜散る今日もあなたの変化球
 ころんころん露の臺みたいな目薬
 春寒や更地の隅に深き井戸
 梅咲くやローカル線の堅き椅子
 のりかへに走る三分梅日和
 梅咲くや曾我の歴史を巡りをり
 ハミングや中州に一群の菜の花
 姥捨や道のしるべに桃の花
 蒲公英の絮毛に託す平和かな

遠藤マツエ
 大石 和子
 大石 雄介
 大木 敬子
 大沢 年子
 大島美恵子
 大塚 行人
 岡田 典代
 岡本 史郎
 奥津ちわき

梅まつり俳句大会について

日時 令和5年2月5日(日)

会場 小田原市民交流センターUMECO

第1・2・3会議室

受付 11時 投句締切 12時 開始 12時半

席題 春季雑詠1句 当日発表席題1句

選・総互選

結社賞 各グループは当日までに千円相当の賞を

ご用意の上事業部にご提供ください。

理事集合 9時半

会場設営、運営にご協力ください。

第76回小田原桜まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「桜又は花」「猫の恋」(いずれも傍題可)

各一句一組

未発表作品に限る

締切 令和五年二月十七日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250・0111 南足柄市竹松一四六三ー七

加藤かほる宛 ○四六五ー七四一五〇六二一

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和五年四月二日(日)

会場 小田原市民交流センター(UMECO)

受付 十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費 五百円(呈飲料)

席題 春季雑詠二句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで 参加賞

(主催) 小田原市観光協会(主管) 小田原俳句協会

(後援) 各地俳句協会

*会場は現在のところ飲食可能ですがなるべく各自、食事を済ませてご参集ください。マスク着用など感染症防止対策は継続します。

立春句会のお知らせ

日時 令和5年2月4日(土) 雨天決行

集合 小田原城天守閣 本丸広場 10時

・短冊は12月理事会にて配布(立春・梅に因んだ句、1月の理事会または当日に持参下さい)
短冊つるし後句会

句会場

そびそ二宮呉服店2階(元オービックビル銀座通り反対側角) 小田原市栄町2ー13ー1

(電話0465ー22ー8121)

*なるべく食事を済ませてご参集ください。
マスク着用等。

会場利用時間 13時〜16時(受付13時)

会費 五百円(賞品代等)

投句 当日囁目3句を短冊にて(受付にて配布、締切13時30分)

句会 14時より総互選 披講は各自

*事前申込の必要はありません。お仲間をお誘い合
わせの上現地にご集合下さい。

◆お詫びして訂正します◆

665号9頁作者名 岸本ひさみ↓岩本ひさみ